

第四十一 文章の誤謬

落合直文

文章といふ者は甚六か敷い者であります、文章は眞善美の三を備へねばならぬ者にて、只事柄を寫したるのみにては、充分とは申されませぬ、今日世間に行はれて居る文章を見るに、事柄が分れば結構であり升が中には往々事柄さへも分らず、何處に論點があるか、何處に主意があるか、更に分らぬ者が多いであります、かつ、時の區

別も、自他の差別も、助辭の係り結ひもなく、實に錯雜なる姿であります、諸君も御承知の通り、我國の文學社會は、非常の混雜にて、其體も種々であります、和文といひ漢文といひ、漢文體といひ、翻譯體といひ、小説文體といひ、書簡文體といひ、言文一致體といひ、歌謠詞曲體といひ、一々擧ぐるに堪へぬ程であります、その中にて最も廣く行はれ居るは、漢文體と、翻譯體と、小説體と、言文一致體との四であります、

漢文體とは、漢文へ施したる訓點より變化したるものにて、その訓點には種々ありますが、最も勢力ありしは、道春點、後藤點、一齋點の三でありました、其訓點によりて論語孟子杯を読み、その語路を覚えて居つて、自分に文章を書く時にも、それを用ゐることとあります、さてその訓點といふものも正しいものならば宜しかれど、甚不規則なるもので、特に一齋點の如きは、極めて誤りが多い所が、其誤りを其儘に讀みて、それをその語氣のまゝにかく故に、その文章も甚拙劣であります、豈夫れ然らんや、然り而してなどの文は、皆その餘波であります、又朝聞道夕死可矣とある文を、朝に道を聞いて夕に死すとも可なりと讀ませてあります、これは聞いたのではなく、これより聞かんとする意なれば、道を聞かばと讀まねばきこえませぬ、君子去仁惡

成名の如きは、仁を去つてと讀ませてあります、これも仁を去らばと讀まねばなりませぬ、かゝる間違を四書五經其他史記漢書等の本から拔出して見たならば、實に非常なものでありませう、平生文章をかゝんとするものは、よく注意せねばなりませぬ、

次は翻譯體であります、この翻譯も、今日の如く文事の開けた上なら、新に語を製造するにも、或は外國語を移すにも、完全な語を撰びて、當て笥むる事が出来ませう、なれども、維新前後草創の際でありました故に、極不完全の者が多い、それを世間の學者が、そのまゝに習用するが故に、一種言ふ可からざる言語があらはれ出で、中には實に讀むに堪へざる者さへあります、例へば(アツタベク)といふが如き語がその一であります、又翻譯體にかぎりて、助辭を濫用することが實に甚しい、ツ、と云ふが如きは、一行に三つ四つ位は必かいてあります、ツ、と云ふ助辭は、物が重なる時にいふ助辭にて、例へば雪は降りツ、と云へば、雪が降りつ降りつするさまなり、然るに「教へツ、ある」行きツ、ある」など、皆似て非なる遣ひざであります、かゝる譯語の其儘に發達したらんには、日本の文學といふものは、いかなる有様になりませう

か、實に殺風景なる境遇に陥らうかと心配にたへませぬ、次に小説體であります、今日は小説の大流行であります、文法語格語法の誤謬は實に夥しい、其上に文章全體よりいふても、品格といふものは更にありませぬ、それは原因のあることにて、小説の仕組は西洋小説によるも、文章は日本古來の小説によるは一般の例であります、ところが馬琴は例外なれど、其以下の焉馬、三馬、京傳、種彦、一九、春水、文京、京山等に至りては至極下等な者であります、その徒か種々想像を逞うして書いた文章を手本にする故、到底上品な文章の書ける筈はありませぬ、私は世間の小説家に向つて大に改良を望みます、

次に言文一致體であります、これは平生の言語を其儘に寫すことなれば、至極簡便なるのみならず、第一分り易い、かつ不文の人にも容易く書ける、故に大に流行致します、私も、言語と文章とは離るべからずと云ふ論者であります、さりながら、これは餘程注意せねばならぬと思ひ居ります、即ち言語を今少し上品に進め、文章を少し引下げやうと云ふことであります、今日世間に行はる、所謂言文一致の文章を見るに、殊更に野鄙陋劣なる言語を列舉するが如し、是の如きは私の取らざるのみな

らず、大に排撃せんとする所であります、

以上四種の文章が猖獗を極め、それにて日々の新聞雜誌も書いてあります故に、見る人聞く人が、自然それに習ひ、遂に今日の如き無味不規則なる有様とはなりたるのであります、

さて、何の業をなすにも、何の學を修むるにも、必それにつきたる學問があります、經濟學法律なれば法律學、繪畫なれば畫學、音樂なれば又音樂の學問があります、然るに獨り文章に至りては、別に學問と云ふ者がいらぬ様になりて居ります、甚其意を得ぬ事である、今日では文典辭典などの話をして、更に人が聴きませぬ、又聴く丈の必要もないと思ふて居る、私杯は往々然云ふ人に出合います、かくて語格語法杯をやカマシクしますと、彼れは國學者である、彼は和學者であると言ひて、却て輕蔑すると云ふやうな姿で、まことに可笑しな譯であります、文章は澤山の言語を綴るものでありますから、其言語の優美に、かつ鮮明ならざるべからざるは勿論、布置よろしきを得ねばなりませぬ、それを研究するには、是非とも文章學によらねばならぬ、又文章に付いて、この文がよいとか、わるいとか、間違つて居るとか、調つてあると

かを知るには、文章學をなしたる上でなければ分らぬ、文章を知らずに彼はいふは決してよい評とは申されぬ、

さきにも陳べたる如く、日本の文章は實に錯雜なる者で、文章が後來如何なる風に發達するか、又如何なる有様に傾いて行くか、今日の所では先きが分らぬ事で、丁度敗船に乗りて、大海へでも押出されたやうな姿であり、升、昨年 of 教育會で、歴史の文に就いて、或る議員のこの歴史は翻譯體も、漢文體も、和語も、俗語も入り混りてある、故之を讀まば世間に行はれて居る文章は悉く讀まるゝに至るべし、誠に都合よき歴史なりとて、賞歎したる事がありました、眞に教育に熱心なる人ならばかゝる文章をうち破り、文章を一定して、子弟の便を計らんとこそ云ふべきなれ、それを其儘にうち捨て置くのみならず、その錯雜なる文章を以て、教科書になさんとは、如何なることでありませうか、甚不心切と申さねばならぬ、そはとまれ、かくまれ、文章を一定せねばならぬ事は明白なる事にて、極端論者の他は皆同意ならんと思ひ居ります、さてその文章は、いづこにて稽古すべき者かといへば、小學校とか、中學校とか云ふ學校がその場所であり、然るに、今日學校の國語科といふものが、果して充分

なるものなるか否やは、一の問題であります、又國語を教ふる教師と云ふものは、いかなる人物なるか、探究せねばなりません、且又その教授法は、何位に進歩して居るか、又如何なる方法を用ゐ居るか、是亦氣をつけねばなりません、されど、それはいづれも教育上の問題にて、容易に決し得べき事ならねば、暫く措いて問はず、假に今日の國語は充分なもの、又學科も、教科書も、教授法も、悉く完全なるものとするも、そればかりにては、文章の改良は六ヶ敷いと思はれます、如何となれば、世人の最も多く讀み、最も繁く目に觸るゝ所の新聞、雜誌、小説と云ふものが、其害をなせばであります、世人は、不規則文を以て書きたる新聞、雜誌、小説に惑はされ、遂に其文章を眞似る風がある故であります、彼の國學で名高い本居宣長先生は、今より殆、百年前に玉菰と云ふ書を書かれ、當時の學者の用ゐて居た、言語の誤謬を正されました、それより文章にも、歌にも、大に氣を附くることゝなりました、私は先生の遺志を繼ぐと云ふ譯ではありませぬが、世間に行はれて居る處の新聞、雜誌、其他、小説様のものに向ひて、酷い誤りのある處を摘發して、少か諸君の注意を乞はんと思ひます、

第一假名のあやまり

を	え	ゐ	う	を	じ
お	ゑ	ひ	ふ	ほ	ち
は	ゐ	い	ゑ	へ	す
わ	い	ひ	へ	ひ	づ

などの假名はその區別なく、みだりに使用して居ります例へばを。か。岡。を。お。か。お。の。れ。己。を。を。の。れ。い。は。岩。を。い。わ。あ。わ。泡。を。あ。は。ふ。え。笛。を。ふ。ゑ。こ。ゑ。聲。を。こ。え。ゐ。ざる。膝。行。を。い。ざる。あ。ち。さ。ゐ。紫。陽。花。を。あ。ち。さ。ひ。く。い。悔。を。く。ひ。す。う。る。居。を。す。ふ。る。す。ゑ。末。を。す。へ。あ。を。青。を。あ。ほ。と。ほ。し。遠。を。と。を。し。おも。ひ。思。を。おも。い。み。じ。かし。短。を。み。じ。かし。ね。す。み。鼠。を。ね。づ。み。と。書いてあります最も傍に漢字でもあれば宛讀してもわかりますが、假名ばかりにては更にわかりませぬ、お。う。な。と。書けば老女の事、を。う。な。と。書けば女の事なり、僅にお。を。の。差よりかゝる相違が出來ます、注意せねばなりませぬ、

第二活語のあやまり

活語には四段、上二段、下二段、上一段、下一段、久志支變格の七種ありて、その七種の段は、又各五段に活きます例へは

堪	へ	へ	ふ	ふる	ふれ
報	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ
怨	む	む	む	むる	むれ
確	め	め	む	むる	むれ

の如し、然るに世人は活語の何物たるもしらず猥りに文章をかきつらねて、

(堪へ。ざるなり)を堪え。ざるなり

(堪ふ。べけんや)を堪ゆ。べけんや

(報い。ん)を報は。ん

(怨む。る)を怨む。る

(確む。る)を確め。る

と書いてあります、又四段の活語を下二段に紛らし、下二段の活語を四段に混するなども多くあります、例へばか。よ。は。す。通。ま。ど。は。す。惑。の如きは四段活なるを下二段

に、あはする(合)きかする(聞)まかする(任)の如きは下二段なるを四段に、うらむ(怨)る。(懲)の如きは上二段なるを四段に誤る等、實に不規則千萬な者であり升又活語に使然自然の差別がありまして同語にても(解)の如きとかんときとくとけと四段に活かすれば使然になり、とけとくとくるとくと下二段に活かすれば自然に也升又(平)の如きはたひらがんだひらぎだひらぐだひらげと四段に活かすれば自然になり、たひらげ、たひらぎ、たひらぐ、たひらぐれと下二段に活かすれば使然になります、この差別を知らず勝手にこれを使用するが故に、意味の分らぬ者が澤山あります、文章上活語ほと、大切な者はなければ、苟も文章をかゝんとする者は、よくその使用法を心得て、間違はぬ様せねばなりません。

第三助辭のあやまり

助辭はこれを使用するに場所があり、又その助辭によりて意味に大に異なる者であります、例へば

も 物二を一に合する辭なり
は 物を二に分つ意なり

ぞ 廣きもの、中にて一をさすなり

こそ 多くあるもの、中にて一を親しくいふ辭なり

かくの如く區別のある者なれば、猥に使用すべき者ではありませぬ、然るに、世人はその區別を知らず、これを使用するが故に、分らぬ事のみ多くあります、

だに 俗にせめてこれなりともといふ意なり

さへ あがる上に物のそふなり

すら やはり猶の意なり

これらは殆その區別なく、皆同じ場所へ用ゐて居ります、甚その意を得ぬ事であり、ます、

てし 使然のことの過ぎし辭なり

にし 自然のことの過ぎし辭なり

これも前と同様であります、この類を一々あげたならば數も限りもありませぬ故、只その一二をあげましたのであります、

第四係結のあやまり

係助辭に三種あり、第一はたゝもにを。第二はのがぞやかなん。第三はこそであり
ます、さてそれを結ぶにも又三種あります、例へば、

し き し けれ
き し しか
す め ね
り る れ
ぬ る ぬれ
む め

の如し、上段は第一の係助辭を結び、中段は第二を、下段は第三を結ぶ者であります、
即ち、

花は。 ちりき
花ぞ。 ちりし
花こそ。 ちりしか

かくの如く係助辭によりて結びざま異なるなり、然るに世人はこれを知らず、過去

とし云へばし。を以て結ばねばならぬ様に心得て行きし、來たりし、盛會にてありし
など書き居るは、大なる誤であります、しは第二係助辭即ちや。か。ぞ。などを結ぶ者な
れば、かかる所は行き、來たりき、盛會にてありきと、上段のきを以て結ぶべきであ
ります、

御前へまかりいづる。

この歌の端書ぞまことしからね。

この處置をいかにする

華族諸君の盡力こそ必要ならん。

癖こそ現はれたり。

外聞あし。

余因て其まゝになしをきける。

好みくの多かる數は八百八好なんあり。

いかばあらんと紹巴に見する。

この歌のこゝろ怪しみ玉ふは用意あることにこそと篤くめでにける。 けり。

いづる(る)衍

ぬ。 いかにかする

ならめ。

たれ。

あし(し)衍

けり。

ある。

みす (る)衍

けり。

(上のこそはきる、なり)

こは或新聞紙二枚のうちより見出したるものであります、

第五か。とや。との差別

か。とや。とは共に疑辭なれど、な。に。といふ詞の下に、おく疑辭には必ずか。といはねばなりませぬ、や。といふは皆あやまりであります、

道とはいかなる道なるや。

か。

神とはいかなる者なるや。

か。

神はいづくにますや。

か。

か、るところは皆か。とか、ねばならぬ

第六な。その格

花なをりそ。

人にないひそ。

をもひなかけそ。

こはな。その格とて、すみてよまねばならぬものを今日の文章をみるにな。ぞ。とそに

濁點を施しおくは、いかなるいはれなるか、甚聞えぬことであります、

第七必、二を要すると。文字

言語と文章との關係

雨のふるとふらぬとを問はず

このとを一にてすませ、言語と文章の關係、雨のふるとふらぬを問はず

と書くは、あやまりであります

第八必、二を要するも。文字

頼みもし又たのまれも。ゑつるに

自ら誓ひもし又自ら酒量を知りもしつるに

これを頼みもし又たのまれつるに、自ら誓ひもし又自ら酒量を知りつるにと書いてありました共にも、助辭が足りませぬ、

第九を。字の不足

せめてはこの地に葬らんもの。と切に請ひたりしが、
水火の苦をすくはんもの。と心を悩したり

これを除かんものと軍を起し
いづれものといふべきところなり、大かたはこのを文字を落す様であります
が氣をつけねばなりません。

第十の文字の贅

受くるの大權

何々するが如きの功にあらず

かゝるところへはの文字は決して加ふべからず

第十一の字の不足

小犬をあそばすに

任すが如き

弊家の幸福之に過ぐ者あらず

あそはするに任するが如き之に過ぐる者あらずと書くべし、この類極めて多し、こ
は他の活段と四段とを混せしより起る者なれば、語學書について研究するがよろ
しい

第十二の文字の贅

あります

ござります

あります、ござりますとかくべし、

第十三と、受くる詞のあやまり、

とは語格にて斷止段より受くべきものを、世人は多く續體段より受くるなり、例へ
ば、

あくと といふべきを あくると

ありとも といふべきを あるとも

なしと といふべきを なきと

こゆと といふべきを こゆると

いたすと といふべきを いたすると

いづと といふべきを いづると

と書くが如し、是亦語學書について研究するがよろしい

第十四し。いとせしとの差別

し。いと書くべきものは、四段佐行の動詞なり、即ち、

さしすせ

に活く詞にて例へば流申、盡暮等の如き詞なり、これは流し、申し、盡し、暮し、といふべきなり、然るに流せし、申せし、盡せし、暮せしなどせしと書くは皆誤なり、又せしの方をし、と誤る者あり、例へば遣し、類なり、この詞は四段に活く詞ならねば遣せしと書くべきなり、世人のこの類を四段に混じて遣しければなど書くは、大なる誤であります、必遣せければと書ねばなりません、又漢語の下に勉強し、關係し、など書く人も往々見受ますが、いけませぬ、漢語はすべてせしと受けねばなりません、

第十五さんとせんとの差別

見せんを見さん、現はさんを現はせんと書く人はなけれど、閱せんを閱さん、讀せんを讀さんなど、誤る事あれば、是も氣をつけねばなりません、又漢語はすべてせんと受くべき者なれど、稍もすれば奏さん、解さん、愛さん、復さん、熟さんなど書く人あ

り、何れもせんと受くべき者なり、關係さん、實行さんと云はぬにて分りまう、第十六され、さるのあやまり

これは多く漢語を受る時なり、例へば、

提出されたりはせられたりと書くべし

出頭されたり

實行さるゝ

延引さるゝ

渡航さるゝ

はせらるゝと書くへし

さはせらの約なりと云ふ人もあれど、そは取るに足らぬ説であります、

第十七たりといふべきところをりとのみいふあやまり、

告げり

老いり

卒へり

載せり

は何れもたりといふべし

掲けり。

散れり。行けり。降れり。などの如く四段なればよろしかれど、その他の段にて告げり。埋れりなどは決してかくべからず。

第十八なるものといふあやまり、

こは法律なる者文學なる者などいふなる者なり。なるはにあるなればかゝるところには當りませぬ。法律といふ者文學といふ者とかくがよろしい。

第十九書簡文のあやまり、

候得共

候へどもとかくべし

御目にかへ

御目にかへりてといふべきところ

下されべく

下さるべくとかくべし

明日御出下され候

下さるべく候と云ふべきところ

明日まゐり候

明日まいらんと云ふべきところ

明日御目にかへり候

明日御目にかへらんと云ふべきところ

かゝるところ實に夥しくあります。又候はゞ候へばなど更に區別せぬがため、大切

なる用事の辨せぬ事が度々あります。

以上に述べたるは、私が新聞雑誌小説等を見て、氣のつきたる者を、少々拾ひあつめて、御話致したのであります。されど、これは一句一字の誤謬に過ぎず、これよりは文章を掲げてその誤謬を正さむ、

一 記せば便よからむ

二 減するは免れざるなり

三 完全すること到底のぞむべからず

四 之を四方に播布せば社會を裨益すること少からず

五 假りに堪へうとするも

六 今後續々産出するに至らば本邦石炭に影響を及ぼすことすくなからず

こは何れも時を誤まりたる文であります。今之を正して左に記さん、

一 記さば便よからむ

二 減すべきは免れざるなり

三 完全せんこと到底のぞむべからず

四 之を四方に播布せば社會を裨益せんこと少なからざるべし。

五 假りに堪へ得べしとするも

六 今後續々産出するに至らば本邦石炭に影響を及ぼさんこと少なからざるべし。

又助辭の不充分のところ

一 昔吳の延陵となんいへる處に季子とよべる人ありける

二 試験を受ける毎に落第する者なきはこれなんこの會のこの上なき功績とやいはまし。

これを正さば

一 昔吳の延陵といへる處に季子とよべる人なんありける

二 試験を受ける毎に落第する者なきはこれなんこの會のこの上なき功績なる。

又上下のうちあはぬ者

一 何ぞ圖らん今反りて賜物さへ下し玉ふ。

二 尙此上幾重にも御引立を垂れ玉はんことを

これを正さば

一 何ぞ圖らん今反りて賜物さへ下し玉はんとは。

二 伏して乞ふ。尙此上幾重にも御引立を垂れ玉はんことを

又文意の反對になりし者

一 御華主様の御愛顧を博し幣店の光榮何ぞこれに若かざるべけんや

この文などは實に拙劣なり

一 御華主様の御愛顧を博し弊店の光榮何をかこれに若くべき

又自然の混同せる者

一 伊國皇帝日本公使に雉子を賜はる。

二 盜賊三名は昨日日本郷警察署の手にて捕縛したり。

三 神田佐柄木町十一番地旅人宿吉永金八方へ盜賊忍入り金四十三圓餘を盜み取られたり。

これを正さば

一 伊國皇帝日本公使に雉子を賜ふ。

二 盜賊三名は昨日日本郷警察署の手にて捕縛せられたり。

三 神田佐柄木町十一番地旅人宿吉永金八方へ盜賊忍入り金四十三圓餘を盜み取りたり。

又文意の通せぬ者

一 服部小平太陣幕の中に進みいり義元に斫りてかゝれば義元太刀を抜くよとみえしが膝をきりつけたり

二 大達關は云云間もなく黃疸になつて療治した甲斐もなく大概是癒たれど云云間もなく元の通りに快復したり

この二文の如き拙劣も甚しといふべし諸君が一讀せられんには必其不充分なる點を見出さるゝならむ故に私は今之を正すをやめませう、

さてかゝる例はいくら擧げておつきぬ事なれば先大概に致さんと思ひます初めにも申述べたる如く日本の文章は實に錯雜なる者でありますこれを此儘にうちすておきなば教育上の不便は云ふまでもなく萬事に付いて不都合であります

ことに外國人などに國語の様子を問はれた時などには何とて答へませうか、まことに面目次第もない譯であらうと思はれます、されば是非共之を回復せねばなりませぬ、教育上の事は教育家諸氏に向て相談も致しませうが、その他の人々、即ち筆を取りて新聞雜誌を書く人などには最も注意をしてもらひ度ものであります、諸先生の著はされたる語格の書も多いことなればそれについて研究せられなば、充分理解することが出來ませう、先今日はこれにて御免を蒙ります、